

2011 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 15:00~16:00 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、電算処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

私たちは、外界から刺激(例えば、眼に入る光)を得て、その情報処理を行って(物の像を得て)対象を認識する(何があるかを知る)。この当たり前の行為において、脳では二つの無意識の作用が起きている。一つは、入力から特徴を⁽¹⁾チユウシユツし、情報の要点だけを取捨選択する作用である。目で見ているものや耳で聞いているものを全て認識しているわけではなく、ある特定のものを選んでいなのだ。「認識のボトムアップ」である。目や耳から入った情報にフィルターをかけているとも言える。そのとき同時にもう一つ、「スキーマ」(個人が経験を通して形成してきた外部環境に対する総合的知識)と照合して対象の姿を再構成するという作用がはたらいっている。外界の情報を解釈して認知内容に制約を与えているのだ。これが「認識のトップダウン」である。既知のものか未知のものかをまず選別し、既知ならその知識に当てはめ、未知ならいっそう注意して何であるかを知ろうとする心的作用のことだ。

これら二つの逆向き(ボトムアップとトップダウン)の作用が組み合わさって初めて「パターン認識」が可能になる。つまり知覚が完成するのである。とすると、二つの作用に何らかのエラーが発生すれば、当然知覚の変容が生じてしまうことになる。

エラーの一つは「(2)」と言われている。老女にも若い女性にも見えるような多義的図形を見たとき、ある特定(老女)の図柄が見えてしまうと、他(若い女性)の図柄が見えなくなってしまうのと似た現象である。自分が知っているものに当てはまると、それ以外は無意識に入ってこないのだ。二つ目は、自分のスキーマに左右されて、見たいと思っっているように見る、あるいは嫌なものや脅威になりそうなものは無視する、という現象である。スキーマが結果的に知覚内容の取捨選択を行ってしまうのだ。エラーの三つ目は、「(3)」と言われる効果で、知らず知らずの間にある種の判断を下して知覚を変容させる効果である。タブー語や蔑視の言葉は覚えにくいことが知られている。これら三つのエラーは分離できず、無意識のうちに犯してしまうものだ。

もう一つ、人間の知覚の特性として「(4)」があることを付け加えておかねばならない。外界をより正しく把握するた

めに、あえて物理的に正しい知覚をせず、対象の情報を自動的に変化させるよう情報処理してしまうことだ。例えば、盲点に投影された光は見えないはずだが、私たちはまわりの情報で補って連続した視覚像を得ている。安定した知覚を保証しようとしてるのである。あるいは、外部環境は変化しても視覚は安定していることも知られている。これはカメラの像と比較してみればよくわかることで、距離が二倍になっても大きさが二分の一になっただけには見え、テレビを斜めから見ても物が歪んだようには見えない。暗くなったのに像はそう変わらず鮮明に見える。実際にある通りに見えたら混乱してしまうだろう。視覚の恒常性があるからこそ見る行為がスムーズに行えるのである。

このことは、見たということは信用できるとしても、その大きさ、形、色、明るさ、位置などについては簡単には信用できないことを意味する。⁽⁵⁾特に対象への手がかりを多く持っているほど、ちよつとした類似だけで簡単に断定してしまう恐れがある。犯人とおぼしき人間を暗闇で見たととき、それが誰であるかを推定すると、実に細かなことまで目撃したように思ってしまう。実は見てはいないのだが、描像を当てはめるので見えたように錯覚するのだ。人間の知覚はあまり当てにならないのである。

私たちの記憶のはたらきを詳しく見ると次の三つの段階を経ている。ある種の知覚信号が入力されると、まず「記録」して保存し（ビデオ撮影にあたる）、それを「保持」して貯蔵し（ビデオテープへの保存）、その後「想起」して出力する（ビデオの再生）という段取りである。記憶には三つの異なった作用が関与しているのだ。このとき特に、情報の種類や質に応じて「保持」する部分が複雑になる。一本のビデオテープだけなら簡単だが、すでに内蔵されているテープと照合したり、キーワードで検索して合体させたりしなければならない。それが多数の知覚なら、当然エラーが生じてしまう。

比較的単純な本を読む場合を考えてみよう。まず目に映った文章を読み取り、いったん短期記憶に貯蔵する。それだけでは意味が確定しないので、長期記憶を呼び出し検索・照合を繰り返して文意を探り、最も合理的な解を見つけて意識に刷り込む、という作業を繰り返している。ごく短時間のうちにこのような情報処理を行っているのである。

記憶はエラーを起こしやすい。すぐに思いつくのは、日頃よく見ているのにすべてを覚えていないことだ。あまり使わない一万円札の図柄はよく覚えているが、毎日のように使っている千円札の方は記憶が定かではない。また、覚えたのに思い出せない

ことがたびたびある。顔が思い出せるのにその名前が出てこないという経験は誰でもありだろう。人間の記憶なんて不確実なものなのである。⁽⁶⁾これらはまだ罪がないが、記憶の各段階で変容が起こる場合がある。ここでは結果的に起こる記憶エラーだけを述べておこう。

認識過程において

(7)

が重要なはたらきをすると先に述べたが、人は

(7)

に沿って新しい出来事を記憶していく

のである。従って、特定の (7) を誘導するようなことが起こると、記憶の変容が生じてしまうことになる。

その一つに「命名効果」がある。例えば、子どもが犬か牛か見分けのつかない絵を描いたとき、先に犬だと命名してしまうと、もはや犬としか記憶に残らなくなってしまう。命名するという行為が特定の記憶を強化してしまい、それしか思い出せなくなるのである。

類似した現象で、「思い込み効果」もある。そこにあるはずと思いつくと、ないものまであると思いつ込んでしまうのだ。子どもに警察官の姿を思い出させて絵を描かせると、普段は拳銃を持っていないのに、拳銃を下げた絵になってしまう。セットとしてある記憶が成立していると、実際にはそれが欠けていても、あるように思い込むという記憶の習性があるのだ。

危険なのは「誘導効果」⁽⁸⁾である。他からの事後情報であるのに、それを見たり聞いたりすることで偽りの記憶が作られ、本人も実際に体験したように思い出されて疑わなくなる場合である。

人間は、ある種の思いがけない体験をすると、それがなぜ起こったかの「仮説」を持ち、仮説から論理的に導かれる「推論」を行い、結果と照合して仮説を「検証」する、という思考回路を採っている。⁽⁹⁾「キノウ的推論」である。それで、赤信号で道路を渡れば交通事故に遭うとか、火に手を近づければ火傷をすることを学び、二度としなくなる。このように結果が明白にわかる場合は簡単だが、結果が曖昧であったり、神秘的に見える体験をしたりすると、思考に狂いが生じてくる場合がある。

例えば、ある晩、友人が夢枕に立って、翌日その人が亡くなった。予知したのか、テレパシーで知らせてきたのか、超感覚的知覚がはたらいて前もってサッチ⁽¹⁰⁾できたのか、夢と死が偶然に一致したのか、とさまざまに思う（「仮説」を持つ）。何か超能力（予知能力やテレパシー）のようなものがあるかもしれないと思いつ込んでしまう（「推論」する）と、それによって他のことも

説明できるかもしれないと欲張ってあれもこれもゴウインに解釈する（結果の「検証」を行う）。このような思考の流れの中で無意識のうちに超能力を信じ込んでしまう二つの事柄が続いて起こると、その解釈に多くのバイアスがかかるからだ。

まず仮説を持ち出す段階で「カクシヨウバイアス」が入り込む⁽¹²⁾。自分にとつて確かそうな仮説しか思い浮かべないことだ。右の例で言えば、夢と死が偶然に一致したとはとても思えないと簡単に棄却してしまう。どの仮説も等しく考える必要があるのに、初めからある仮説を除外して考えるというバイアスがかかっているのである。

もう一つは、推論の段階で、ある目立った事柄二つ（AとBとする）が続けて起こると、ただ目立つという理由でその二つを結びつけて（Aが原因でBが起こったと）考える癖がある。この二つに関連（因果関係）があると推論してしまう傾向で、「関連性の錯誤」あるいは「相関の錯誤」と呼ばれている。夢を見たということとその人が死んだということを、必ず関連があると思いつむ心的作用である。単なる偶然の一致（A、Bは無関係）とは考えないのだ。

（池内了『擬似科学入門』による）

〔問一〕 傍線(1)(9)(10)(11)(12)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 空欄(2)(3)(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

- A 知覚的防衛 B 知覚の恒常性 C 意識的判断 D 文脈効果 E 知覚信号

〔問三〕

傍線(5)「特に対象への手がかりを多く持っているほど、ちょっとした類似だけで簡単に断定してしまう恐れがある」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 対象への手がかりが多い場合には、まわりの情報で視覚像を補う必要がなくなるため、実際にある通りに見え混乱が生じるから。

B 対象への手がかりが多いと、大きさ、形、明るさ、位置など視覚像がそれぞれ分散した形になってしまうので、全体像がつかめなくなるので。

C 対象への手がかりが多いと、あらかじめ持っていたイメージとのずれがそれだけ多くなってしまうため、当て推量で視覚像を決めてしまうことになるため。

D 対象への手がかりが多い場合には、対象の情報を自動的に変化させる作用が強くなるため、視覚像はこれしかないと思いついてしまうので。

E 対象への手がかりが多いと、自らの視覚像について確信が強くなるので、見たことがないと分かっているにもかかわらず、そのことを隠そうとしてしまうので。

〔問四〕

傍線(6)「これらはまだ罪がない」とあるが、その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 記憶が不十分で思い出せないだけで、忘れた内容もいつかはまた思い出すことができるから。

B 記憶していないという自覚はあり、覚えていないことすら覚えていないわけではないのだから。

C 記憶していないだけのこと、間違った内容を正しい記憶と思いついていないわけではないから。

D 記憶がないといっても、その内容を話している相手にたずねたりして確認することができるから。

E 記憶にないことの多くは、日常生活を送る上では正確に記憶しておく必要がないものだから。

〔問五〕 空欄(7)に入れるのもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 知覚信号 B スキーマ C パターン認識 D 記憶の保持 E 情報処理

〔問六〕 傍線(8)「誘導効果」とあるが、その例としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A マスコミによるアンケートなどで、質問の仕方によって、回答者が特定の回答をするように仕向けられていくこと。
B 選挙の投票行動で、マスコミが当選予測を流すことで、当選確実とされた候補者に多くの人が投票しようとするこ
C 事件の犯人と疑われた人が、警察での尋問の圧力により、自分がやっていない犯罪を無理に自白させられてしま
と。
D 洗剤の効果が何度も宣伝されることで、実際に使ったことがなくてもその効果を間違いないと確信してしまうこと。
E 交通事故の目撃者が、繰り返し事故の様相がマスコミで伝えられることで、見てもいないことを目撃したと思うこと。

〔問七〕 次の文ア～オのうち、本文の筆者の考えと合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

ア 「認識のボトムアップ」と「認識のトップダウン」により知覚が完成するが、エラーが生じやすいのは、より複雑な過程である「認識のトップダウン」の方である。

イ 記憶のはたらしには、「記銘」「保持」「想起」の三段階があり、各段階でエラーが生じうるが、とりわけそれぞれの段階への移行過程でエラーが生じる可能性が高い。

ウ 「命名効果」と「思い込み効果」が類似しているのは、あらかじめ命名することや、その職業についてのイメージから思い出す記憶が一定のものに限定されるという共通性があるからだ。

エ 人間の思考には、「仮説」「推論」「検証」という三段階あり、結果が明白な場合にはこの三段階のつながりが分かりやすいが、明白でない場合には、誤った解釈をすることがある。

オ 記憶と思考はそれぞれ三段階からなっているが、これは記憶と思考の仕組みが基本的に類似しているためであり、エラーの仕組みも結果的に似ていると言える。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(20点)

本稿の目的は、日本で長らく見失われてきた「教育の職業的意義」の回復が今まさに必要とされているということを、広く世に訴えることにある。しかし、そのように言うと、すぐにいくつかの否定的な反応が返ってくることを、私はこれまで講演や座談会などの場やネット上で何度も経験してきた。そうした反応の本身は毎回ほぼお決まりのものであり、いくつかの種類化できる。まずそれら定番の批判に対する私からの反論を、あらかじめ示しておくことにしよう。

なお以下では、「教育」という言葉を、いわゆる学校教育制度の中で行われる営みを指すものとして用いており、それ以外の家庭教育や企業内教育、社会教育などについて触れる場合はそのように明示することにする。

「教育に職業的意義は不要だ」という意見がある。これは、教育が仕事に役立つ必要はない、⁽¹⁾教育はもっと高尚な、人格を形成し教養を高めるためのもの、あるいは一般的・基礎的な知力や柔軟な「人間力」を養うためのものだ、という主張である。このような主張は、教育をきわめて理想視する「教育学」的な立場からなされる場合もあれば、逆に産業界の人事や採用の実態をふまえた現実主義的立場からなされる場合もある。

前者の「教育学」的立場は、教育と仕事とを関連づけることは、教育にとって墮落だとみなす。教育は独自の価値や理念を追求すべきものであり、その外部にある仕事の世界の現実に追従すべきではないというのが彼らの主張である。

他方の産業界の現状に即する立場は、教育の職業的意義など重んずる気はないことを宣言する。あるシンポジウムで私が同席した有名企業の人事担当者は、「若い人は『地頭』^{じわたま}(ビジネス界でしばしば用いられる、本質的な頭の良さのようなものを意味する言葉)が良くて素直で安い給料で働いてくれさえすればいいんだ」と、「本音ベース」の発言をしていた。

このように、教育固有の理念を掲げる側と、人を雇って働かせる側とは、それぞれまったく別の論理に基づきながらも、
(2) 点で、奇妙にも一致しているのである。

私は、教育理念を掲げる側でも人を働かせる側でもなく、働く者、とくに働く若者の立場から「教育の職業的意義」を主張し

ている。

「教育が仕事に役立つ必要はない」という主張は、仕事のための具体的な知識や技能を身につけうる場が、社会の中で教育以外にきちんと成立している場合にのみ成り立つ。確かに、従来の日本では企業がそのような場として一定程度機能していた。しかし、現在の日本社会では、そのような条件はどんどん当てはまらなくなってきている。九〇年代初頭から著しく増加してきた非正社員は、職業能力を身につけ伸ばすことができる機会がきわめて限られている。そればかりか正社員であっても、企業は育成のための投資を縮減してきているし、企業が個々の従業員の能力開発ニーズをきめ細かく把握してそれに対応することはますます難しくもなっている。

それならば、これまでは職業的意義を求められずにすんできた教育が、その外部では担保されなくなってきた職業能力形成機能を——少なくとも部分的には——担うようになる必要がある。それは単に従来の企業中心の人材育成の後退を補うためだけではなく、従来の企業依存的な人材育成の問題を積極的にただすためにも必要である。

教育は莫大な社会的費用をかけて日々運営されている制度である。日本で年間に教育に費やされている費用は、他の先進諸国に比べて決して多いものではないとはいえ、約一七兆円にのぼる。このような巨大な社会的事業が、人格形成云々という雲をつかむような目的のみに費やされていいはずはない。教育を潜り抜けて社会に出てゆく若者の大半は仕事に就く。しかも仕事の世界における労働条件はますます過酷さを増している。そうした厳しい仕事の世界で生きてゆくために必要な準備を若者に与える役割から、教育という巨大な制度が目をもむけていてよいはずがない。

そのような仕事の世界への準備として欠かせないのが、第一に、働く者すべてが身につけておくべき、労働に関する基本的な知識であり、第二に、個々の職業分野に即した知識やスキルである。総じて、前者は、働かせる側の圧力的に大きな力、しばしば理不尽なまでの要求を突きつけてくる力に対して、働く側がただ翻弄されるのではなく法律や交渉などの適切な手段を通じて

(3) するための手段であり、後者は働く側が仕事の世界からの要請に (4) するための手段であるといえる（ただし、このような性格づけは相対的なものであり、いずれも内容に応じて (3) / (4) の両面をもちうる。

仕事に就く者が身を守るためには、このいずれかだけでは不十分かつ偏っており、双方が両輪として不可欠である。〔3〕
してばかりでも、一方的に〔4〕に努めるだけでも、働く者は苦しい状況に陥る。両者のバランスの上で、働く者が力と声を発揮していくことが不可欠なのである。人格形成や教養の獲得という教育の崇高な目的をすべて否定するつもりはないが、そのような目的を、個人の職業生涯と上記二つの意味で関わりをもちうるような形で制度的に追求することが、個人にとっても社会にとっても必要な社会状況が今生まれているのである。

また、若者に対して「地頭」や「素直さ」のみを産業界・企業が期待している現実を、そのまま是認すべきではない。それは個人にとっては企業の言いなりに使いまわされることを意味するし、企業自身にとっても、分野・領域別の高度な技術や知識、個別の職務に関する具体的なスキルやノウハウを軽視することは、生産性と競争力の低下を招く。「教育が仕事に役立つ必要はない」という悠長な主張をし、教育という巨大な社会的事業を浪費していられる状況ではすでになくなってきているのだ。

(本田由紀『教育の職業的意義』による)

〔問一〕 傍線(1)「教育はもつと高尚な、人格を形成し教養を高めるためのもの」とあるが、この主張に対する筆者の評価を表している文を本文中から抜き出し、初めの五字と終りの五字で示しなさい。(句読点は一字に数えない)

〔問二〕 空欄(2)に入れるのにもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 教育と仕事を切り離して考え、切り離すことを望ましいとする
- B 教育は現実には役立たないものであり、抽象的な価値を持つとする
- C 仕事をする能力は教育では得られない、より具体的・本質的な能力だと考える
- D 仕事とは現実的なもので、教育が理想を求めると相補い合うものだと考える

〔問三〕 空欄(3)と空欄(4)に入る語の組み合わせとしてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|--------|--------|---|--------|--------|
| A | (3) 順応 | (4) 対応 | B | (3) 抵抗 | (4) 適応 |
| C | (3) 反抗 | (4) 同調 | D | (3) 対立 | (4) 協調 |

〔問四〕 次のア～カについて、本文の筆者の考えに合致しているものにはA、合致していないものにはBの符号で答えなさい。

- ア 教育にとって人格形成がもつとも崇高で重要な役割である。
- イ 企業内で人材育成は可能なので、教育には一般的知力の育成のみを期待すればよい。
- ウ かつては「教育が仕事に役立つ必要はない」という主張はそれなりに成り立った。
- エ 企業はかつてのように、企業内での人材育成に努力すべきである。
- オ 現在は、教育が労働に関する知識や職業のスキルを育成すべきである。
- カ 教育にかかる経費は専ら個々の職業分野の知識を得ることのために費やされるべきだ。

三 次の文章は、建礼門院右京大夫が、参内していた源通宗の恋の取り次ぎをしたときの逸話である。これを読んで、後の間に答えなさい。(30点)

通宗の宰相中将の、つねに参りて、女官などたづぬるも、遙かに(1)えしもふと参らず。つねに「女房に見参せまほしき、いかがすべき」と言はれしかば、この御簾の前にて、うちしはぶかせたまはば、聞きつけむずるよし申せば、「まことしからず」と言はるれば、(4)「ただここともとに立ち去らで、夜昼さぶらふぞ」と言ひてのち、「露もまだひぬほどに参りて、立たれにけり」と聞けば、召次して、「いづくへも追ひつけ」とて、走らかす。

(6) 萩の葉にあらぬ身なれば音もせで見ると思ふなるべし

久我へ行かれにけるを、やがてたづねて、文はさしおきて帰りけるに、さぶらひして追はせけれど、「あなかしこ、返しとるな」と教へたれば、「鳥羽殿の南の門まで追ひけれど、茨、枳殻にかかりて、藪に逃げて、力車のありけるに紛れぬる」と言へば、「よし」とてありしのち、「さる文見ず」とあらがひ、また「参りしかど、人もなき御簾の内はしるかりしかば、立ちにき」と言へば、また「はたらかで見しかど、あまり物騒がしくこそ立ちたまひにしか」など言ひしろひつつ、五節のほどにもなりぬ。

(『建礼門院右京大夫集』による)

注 女官……下級職の女性官人。 召次……取り次ぎの者。 久我……通宗の別邸のあった地。

力車……荷を運ぶ車。 言ひしろひつつ……言い争いつつ。

五節……十一月、五節舞姫の舞樂を中心におこなわれる宮中行事。

〔問一〕 傍線(2)(4)(8)(9)の会話はそれぞれ誰が言ったものか。その人物を左の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- A 通宗
- B 女官
- C 建礼門院右京大夫
- D 召次
- E さぶらひ

〔問二〕 傍線(1)「えしもふと参らず」、(3)「まことしからず」、(7)「やがて」の解釈としてもっとも適当なものを、左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

(1) えしもふと参らず

- | | | | |
|-----------------|------------------|-----------------|-----------------|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| 簡単に会いに参ることもできない | 頻繁に手紙を届けることもできない | 容易に参内してくれることはない | 下座の方にすぐ参ってはいけない |

(3) まことしからず

- | | | | |
|--------------|-------------|-----------|---------|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| 本当に嘘だとは思えない | 本当のようには思えない | 本当はそうではない | 本当に怒らない |

(7) やがて

- | | | | |
|--------------|--------|------|------|
| ┌──────────┐ | | | |
| D | C | B | A |
| やっとのことで | だいぶ経って | ただちに | そうして |

〔問三〕 傍線(5)「露もまだひぬほど」について、(ア)一日のいつごろの時間をさすか、(イ)「ぬ」と同じ助動詞が用いられているの

はどれか、左の各群の中から選び、それぞれ符号で答えなさい。

- (ア) A 早朝 B 昼 C 夕方 D 宵 E 真夜中
(イ) A たづぬる B 立たれにけり C 紛れぬる D さる文見ず E 参りしかど

〔問四〕 傍線(6)「萩の葉に……」の歌は、建礼門院右京大夫が通宗に対して、自分が御簾の内にいたことを主張した歌である。

なぜ建礼門院右京大夫はこのような歌をよんだのか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 通宗と女房との密会を自分が密かに見ていた、と通宗が思い違いをしていることを伝えたかったから。
B 通宗と女房との密会をこっそり見てしまったが見ぬふりをした、ということを通宗に伝えたかったから。
C 通宗と女房との取り次ぎをするために静かに控えていたのに通宗が見逃した、ということ伝えたかったから。
D 通宗と女房との取り次ぎをこっそりしたのは他ならぬ自分である、ということを通宗に伝えたかったから。
E 通宗と女房との取り次ぎを口頭ではなく手紙にする機転を利かせたのは自分だと、通宗に伝えたかったから。